

STILL ALIVE

国際芸術祭

あいち2022

2022.7.30—10.10

International
festival of
contemporary art,
performing arts
and learning
in Aichi

プレスリリース

2021年8月23日 国際芸術祭「あいち」組織委員会

「あいち」の国際芸術祭

2010年から3年ごとに開催されており、今回で5回目を迎えます。国内最大規模の芸術祭の一つであり、国内外から多数のアーティストが参加します。愛知芸術文化センターのほか、県内の都市のまちなかにも広域に展開します。現代美術を基軸とし舞台芸術なども含めた複合型の芸術祭で、ジャンルを横断し、最先端の芸術を「あいち」から発信します。

開催目的

- ・ 新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・ 現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・ 文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

目次

開催概要	—————	P2-3
コンセプト	—————	P4
ロゴ	—————	P5
参加アーティスト(第一弾)	—————	P6-12
ラーニング・プログラム	—————	P13

開催概要

名称	国際芸術祭「あいち2022」 <small>ニージロニニ</small>		
テーマ	STILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから		
芸術監督	片岡 真実 (森美術館館長、国際美術館会議(CIMAM)会長)		
企画体制	キュレトリアル・アドバイザー	チーフ・キュレーター(学芸統括)	キュレーター(ラーニング)
	コスミン・コステイナス [パラサイト エグゼクティブ・ディレクター/キュレーター]	飯田 志保子 [キュレーター]	会田 大也 [山口情報芸術センター(YCAM) アーティストティック・ディレクター]
	ラーナ・デヴェンポート [南オーストラリア州立美術館館長]	キュレーター(現代美術)	山本 高之 [アーティスト/ スクール・イン・プログレス・コディレクター/ オンゴーイング・スクール・ディレクター]
	マーティン・ゲルマン [インディペンデント・キュレーター]	中村 史子 [愛知県美術館主任学芸員]	
	ウンジー・ジュー [サンフランシスコ近代美術館キュレーター]	堤 拓也 [キュレーター/グラフィックデザイナー]	
	ガビ・ンゴボ [ジャバット・アート・センター キュレトリアル・ディレクター]	パフォーミングアーツ・アドバイザー	
	ヴィクトリア・ノーソーン [ブエノスアイレス近代美術館館長]	藤井 明子 [愛知県芸術劇場プロデューサー]	
	トビアス・オストランダー [インディペンデント・キュレーター]	前田 圭蔵 [アートプロデューサー]	
	ラルフ・ルゴフ [ハイワード・ギャラリー館長]	キュレーター(パフォーミングアーツ)	
	島袋 道浩 [美術家]	相馬 千秋 [アートプロデューサー/ NPO 法人芸術公社代表理事]	
会 期	2022年7月30日(土)～10月10日(月・祝) [73日間]		
主な会場	愛知芸術文化センター／一宮市／常滑市／有松地区(名古屋市)		
主 催	国際芸術祭「あいち」組織委員会(会長 大林 剛郎(株式会社大林組代表取締役会長))		
事業展開	現代美術	・国内外の80組程度のアーティスト及びグループの新作を含む作品を展示し、最先端の現代美術を紹介します。 ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターや、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市)での作品展示など、県内での広域展開を図ります。	
	パフォーミングアーツ	・国内外の先鋭的な演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品を、愛知芸術文化センターを中心に10演目程度上演します。	
	ラーニング	・幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。	
	連携事業	・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。 ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内数か所で開催します。 ・企画公募により選考された地元文化芸術団体等と共催で舞台公演を行います。	
	オンライン展開	・会場での作品展示や上演等のほか、オンラインでの映像配信やプログラムなどを実施します。	

テーマ・コンセプト(要約版)

STILL ALIVE

今、を生き抜くアートのちから

未曾有のパンデミックによって現代社会のさまざまな構造が浮き彫りになり、環境、政治、経済、文化といったあらゆる領域から新たな提言が求められています。現代美術やパフォーマンス・アーツといった芸術は、その歴史を振り返っても、常に時代を反映し、真実を追究し、不確かさのなかから未来のための新しい価値観を提示してきました。世界がさらに複雑化した今日では、芸術分野においても、多様な文化に対する理解や敬意を求める多様性(ダイバーシティ)や包摂性(インクルージョン)がますます重視され、同時に持続可能な世界の在り方が模索されています。

国際芸術祭「あいち2022」のテーマ「STILL ALIVE」は、愛知県出身のコンセプチュアル・アーティスト河原温が、1970年代以降、電報で自身の生存を発信し続けた《I Am Still Alive》シリーズに着想を得ています。「あいち2022」は、この「STILL ALIVE」を多角的に解釈し、過去、現在、未来という時間軸を往来しながら、愛知県の誇る歴史、地場産業、伝統文化の再発見、生きることの根源的な意味などを考えます。また、現代美術の源流を再訪すると同時に、類型化されてきた領域の狭間にも注目します。とりわけ世界の現代美術の底流をなすコンセプチュアル・アート、文字を使った美術表現やポエトリー(詩)、現代美術とパフォーマンス・アーツを横断する表現などに光を当てます。さらに、多様なラーニング・プログラムを通して、国際芸術祭「あいち2022」を不確かさや未知の世界、多様な価値観、圧倒的な美しさと出会う場と考えます。国際芸術祭「あいち2022」が、人生のどの一瞬にあっても、明日を生きるためのポジティブなエネルギーに繋がる、心躍る出会いや体験の場になることを目指します。(全文は公式Webサイトに掲載)

国際芸術祭「あいち2022」芸術監督 片岡 真実

ハートのかたちは、芸術監督とのディスカッションのなかで、愛知県全体の形状と、知多半島と渥美半島に囲まれる三河湾の形状が二重のハートを連想させることと、「STILL ALIVE」というテーマから「生きる」意味を象徴する心臓をイメージさせるというインスピレーションから生まれたものです。

それを起点にロゴを考える過程で、県名が「愛」知県であることや、この地への「愛」情という意味なども重なってきました。

色は、「猩々緋(しょうじょうひ)」や「常滑焼」など、愛知県をイメージする複数の赤を集約しています。猩々は猿に似た中国の伝説上の生き物で、名古屋市南部を中心に地域のお祭りで親しまれており、今回の会場の一つである有松地区の有松天満社の秋祭りでも天狗と共に登場します。猩々緋の羅紗は戦国時代に織田信長や豊臣秀吉などの武将が陣羽織に仕立てたという歴史もあり、愛知にもゆかりがある色です。

県民の皆様にあいさつをしながら、日本、そして世界へと発信されていく、シンボリックなロゴマークを目指しました。

国際芸術祭「あいち2022」公式デザイナー 田中 義久



STILL ALIVE

国際芸術祭

あいち2022



写真:野村佐紀子

田中 義久 Tanaka Yoshihisa

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館(2019年、イタリア)、Tokyo Art Book Fair(2020年)、東京都写真美術館などのVI(ビジュアル・アイデンティティ)計画や、アーティストと数多くの作品集を制作している。また、アーティストデュオ「Nerhol」として活動しており、近年の展覧会に「第八次椿会 ツバキカイ8 このあたらしい世界」SHISEIDO GALLERY(2021年、東京)、「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」埼玉県立近代美術館(2020年)、個展「Promenade」金沢21世紀美術館(2016年)がある。

参加アーティスト一覧

2021年8月23日時点、アルファベット順。

アーティスト名 (グループ名を含む)		生／結成年(没年)	出身／結成地	活動拠点
ホダー・アフシャール	Hoda AFSHAR	1983	イラン	オーストラリア
リリアナ・アングロ・コルテス	Liliana ANGULO CORTÉS	1974	コロンビア	コロンビア
ヤコバス・カポーン	Jacobus CAPONE	1986	オーストラリア	オーストラリア
ケイト・クーパー	Kate COOPER	1984	英国	英国／オランダ
メアリー・ダパラニー	Mary DHAPALANY	1950	オーストラリア	オーストラリア
遠藤 薫	ENDO Kaori	1989	日本	日本
潘逸舟(ハン・イシュ)	HAN Ishu	1987	中国	日本
河原 温	On KAWARA	1932(2014)	日本	米国
バイロン・キム	Byron KIM	1961	米国	米国
アンドレ・コマツ	André KOMATSU	1978	ブラジル	ブラジル
小杉 大介	Daisuke KOSUGI	1984	日本	ノルウェー
ミシェック・マサンヴ	Misheck MASAMVU	1980	ジンバブエ	ジンバブエ
三輪 美津子	MIWA Mitsuko	1958	日本	日本
モハンマド・サーミ	Mohammed Sami	1984	イラク	英国
百瀬 文	MOMOSE Aya	1988	日本	日本
奥村 雄樹	OKUMURA Yuki	1978	日本	ベルギー／オランダ
カズ・オオシロ	Kaz OSHIRO	1967	日本	米国
プリンツ・ゴラーム	Prinz Gholam	2001	ドイツ／レバノン	ドイツ
眞田 岳彦	SANADA Takehiko	1962	日本	日本
笹本 晃	SASAMOTO Aki	1980	日本	米国
塩田 千春	SHIOTA Chiharu	1972	日本	ドイツ
横野 明日香	YOKONO Asuka	1987	日本	日本

アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。ただし、出身国や地域の慣習またはアーティスト自身の希望により、姓名順ではない表記も一部あります。参加アーティストの生没年、出身地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

ホダー・アフシャール

Hoda Afshar

1983年テヘラン(イラン)生まれ。メルボルン(オーストラリア)拠点。

ホダー・アフシャールは、ドキュメンタリー的な映像制作の本質と可能性を探究する。写真と映像にまたがる表現をととしてジェンダーや周縁性、移動について考察。作品では、イメージとの戯れやドキュメンタリー写真の概念的・演出的な側面を融合させることで、伝統的な映像実践を断ち切る試みを行う。近年の展覧会に「WE CHANGE THE WORLD」ビクトリア州立美術館、「PHOTO 2021」(共に2021年、メルボルン、オーストラリア)、ラホール・ビエンナーレ02(2020年、パキスタン)、「Defining Place/Space: Contemporary Photography from Australia」サンディエゴ写真美術館(2019年、カリフォルニア、米国)、「Primavera 2018」オーストラリア現代美術館(シドニー)など。2015年にはNational Photographic Portrait賞、2018年にはBowness Photography賞を受賞(共にオーストラリア)。



《リメイン》2018
© the artist and Milani Gallery

リリアナ・アングロ・コルテス

Liliana Angulo Cortés

1974年ボゴタ(コロンビア)生まれ。ボゴタ(コロンビア)拠点。

アフリカ系アーティスト、リリアナ・アングロ・コルテスは、コロンビア国立大学卒業後、イリノイ大学シカゴ校にて美術の修士号を取得。様々な地域のアフリカ人ディアスポラで活動し、グループ型の手法と批判的な芸術実践を通じてアフリカ系コミュニティの抱える困難を浮き彫りにすることを目指す。

彼女は、表象やアイデンティティにまつわる問いや、人種や脱開発論についての議論に関する問いから、記憶や権力のあり様を考察する。それらの課題と向き合うため、プロジェクトに参加する人々の身体や、イメージ、経験を通して、ジェンダー、民族性、言語、歴史、政治について考えていく。彼女の芸術実践は、複数のメディア、パフォーマンス系活動、文化的慣習、歴史的賠償、また社会組織との共同制作などの要素を包含する。これまでコロンビア国内外で個展やグループ展に参加。芸術活動は必要不可欠であるという理解のもと、芸術分野のあらゆる側面で活躍する。ボゴタ市の文化部門とも協働したことがある。



《Un negro es un negro》「Porters Wigs」シリーズ、1997-2001
Courtesy of the artist

ヤコバス・カポーン

Jacobus Capone

1986年パース(オーストラリア)生まれ。フリーマントル(オーストラリア)拠点。

ヤコバス・カポーンは、パフォーマンスや写真、ビデオ・インスタレーション、絵画、サイト・スペシフィック作品などを取り入れた活動を継続して行う。詩的な表現が特徴的な彼の表現の根底には、他者にどのように知覚されようとも、すべての行為を一つの生きた経験へと統合しようとする全体論的な性質がある。2007年には、オーストラリアを徒歩で横断し、インド洋の海水を太平洋に注いだ。

作品は台北市立美術館(台湾)、タラワラ美術館(オーストラリア)、MOMENTUM(ベルリン、ドイツ)など世界各地で展示されており、パース・インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート(オーストラリア)ではパース国際芸術祭2017の一部として個展「Forgiving Night for Day」を開催した。その他、数多くの国際的なフェスティバルやフェローシップ、アーティスト・イン・レジデンスに参加しており、2016年にはJohn Stringer賞を受賞。



《Forewarning, Act 2 (Sincerity & Symbiosis)》2019
Courtesy of the artist and Moore Contemporary

ケイト・クーパー

Kate Cooper

1984年リバプール(英国)生まれ。ロンドン(英国)及びアムステルダム(オランダ)拠点。

台北市立美術館(台湾)と2021ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート・トリエンナーレ(ニューヨーク、米国)での展覧会が予定されている。近年開催した個展は「Symptom Machine」SCAD美術館(2021年、ジョージア、米国)、「Screens Series: Kate Cooper」ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート(2020年、ニューヨーク、米国)、「Symptom Machine」ヘイワード・ギャラリー(2019年、ロンドン、英国)、「Sensory Primer」ア・テイル・オブ・ア・タブ(2019年、ロッテルダム、オランダ)など。また、グループ展ではデュッセルドルフ美術館(2021年、ドイツ)、パレド・トーキョー(2020年、パリ、フランス)、ミシガン大学美術館(2019年、アナーバー、米国)、アムステルダム市立美術館(2018年、オランダ)、ボストン現代美術館(2018年、米国)などで作品を発表している。



《インフェクション・ドライブス》2018
Image courtesy of the artist

メアリー・ダパラニー

Mary Dhapalany

1950年ガルピル(オーストラリア)生まれ。ラミンジニング(オーストラリア)拠点。

メアリー・ダパラニーは誇り高きマンダルブイ族の女性として、40年以上芸術活動を続けている。彼女の編む作品は、先祖の女性たちが代々編み手として受け継いできた伝統工芸の象徴である。現在70代のダパラニーは、タコノキの葉で作った作品(ガンガ)を染めるため、土顔料や植物の根から抽出した天然染料を用いる。ダパラニーの作品は、ビクトリア州立美術館(メルボルン、オーストラリア)、アートバンク(シドニー、オーストラリア)、シカゴ大学ブース・スクール・オブ・ビジネス(米国)など多数のコレクションに収蔵されている。



《マツ》2020
Courtesy of BulaBula Arts

遠藤 薫

Endo Kaori

1989年大阪府生まれ。大阪府及び沖縄県拠点。

2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ(紬織、重要無形文化財保持者)主宰、アルスシムラ卒業。ベトナムと沖縄、東京と各地方を拠点に、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係を紐解き、主に染織技法を用いて、制作発表を続けている。主に雑巾や落下傘、船の帆を制作し「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマンスにトレースし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。最近の主な展示に「第13回 shiseido art egg」資生堂ギャラリー(2019年、東京)、「Welcome, Stranger, to this Place」東京藝術大学大学美術館(2021年)など。「第13回 shiseido art egg」ではart egg大賞を受賞した。



《閃光と落下傘》2020、国際芸術センター青森
Photo: Delphine Parodi

潘逸舟(ハン・イシュ)

Han Ishu

1987年上海(中国)生まれ。東京都拠点。

幼少期に上海から青森に移住した経験をきっかけに、異なる環境の中で生まれた土地と人間、共同体と個人の見えない関係性を、自らの身体を軸に考察してきた。作品においては映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真などの様々なメディアを用いて表現している。

これまでに、水戸芸術館、弘前れんが倉庫美術館、東京都現代美術館など国内各地の他に、ボストン美術館(米国)、ユダヤ博物館(ニューヨーク、米国)、上海当代美術館(中国)などで展示し、オーストラリアと米国でアーティスト・イン・レジデンスに参加。また、日産アートアワード2020にてグランプリ受賞。



《ほうれん草たちが日本語で夢を見た日》2020、神戸アートビレッジセンター
Photo: 表恒匡

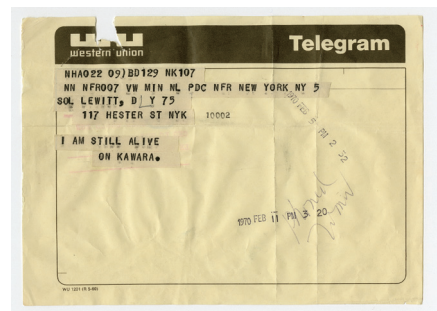
河原 温

On Kawara

1932年愛知県生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2014年、同地で没。

国際的に知られるコンセプチュアル・アーティストの一人である河原温は、「デイト・ペインティング」による《Today》シリーズ(1966-2013年)などで高い評価を得ている。一枚の絵画を一日で完成させるという自らに課したルールに従い、48年間に渡って、約3000枚の単色のキャンバスに制作当日の日付を描いた。また「I AM STILL ALIVE(いまだ生きている)」というメッセージだけが記された電報を送った《I Am Still Alive》シリーズ(1970-2000年)もよく知られている。「あいち2022」のテーマとコンセプトは、送り手も受け手も一過性の存在であることを再認識させるこのメッセージから着想を得ている。

主な個展は「河原温 連続／非連続 1963-1979」(1980-81年、国立国際美術館他)、「河原温 反復と対立」(1991年、ICA名古屋他)、「On Kawara - Silence」(2015年、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、米国)など。



ソル・ルウィットに宛てた電報、1970年2月5日
《I Am Still Alive》(1970-2000)より
LeWitt Collection, Chester, Connecticut, USA
© One Million Years Foundation

バイロン・キム

Byron Kim

1961年サンディエゴ(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

バイロン・キムはしばしば、抽象的崇高と形容されるような領域で創作を行う。彼の作品は、抽象と具象、コンセプチュアル・アートと純粋絵画のはざまに存在する。20年以上続く制作期間で1000を超える作品数となった「サンデー・ペインティング」シリーズでは、毎週の空模様を記録し、絶えず変化する、広大な宇宙とささやかなアーティストの日常を対比する。このシリーズは、河原温の《Today》シリーズにおける「デイト・ペインティング」(1966-2013年)や、ポストカードのシリーズ《I Got Up》(1968-1979年)などに大きく影響を受けたものである。

キムの作品で最も知られているのは、1993年のホイットニー・ビエンナーレに出品され、現在も制作継続中の絵画《提喻(Synecdoche)》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー、米国に収蔵)だろう。人間の肌の色を表した何百ものパネルがグリッド上に構成され、単色の抽象画であり、集団の肖像画とも言える作品だ。



「サンデー・ペインティング」, 2001年1月7日~2018年2月11日の展示風景
2018年1月5日~2月17日
Courtesy of the artist and James Cohan

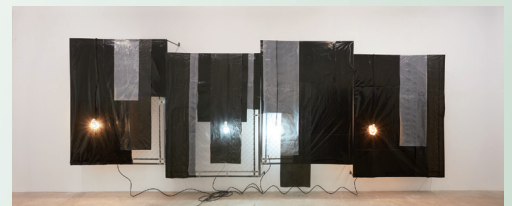
アンドレ・コマツ

André Komatsu

1978年サンパウロ(ブラジル)生まれ。サンパウロ(ブラジル)拠点。

1990年代のブラジルの民主主義の復興と新自由主義経済の導入を間近に見つめてきたアンドレ・コマツの作品は、世界中の人々のさまざまな生き方や、都市空間や権力との向き合い方に対して疑問を投げかける。「コマツは、どこにでも潜んでいる権力や社会的葛藤に関心を抱き、彼の彫刻・インスタレーション作品のテーマの原点となっている。作品タイトルの多くはミシェル・フーコーに拠っており、フーコーの「権力の微視的物理学(microphysics of power)」の理論は、作品タイトルの域を超え、コマツの関心事と世界観の中核を成している」(ジャコボ・クリヴェリ・ヴィスコンティ、キュレーター)。

主な展覧会に「Avenida Paulista」サンパウロ美術館(2017年、ブラジル)、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ(2015年、ブラジル館、イタリア)、「Beyond the Supersquare」ブロンクス美術館(2014年、ニューヨーク、米国)など。



《Fantasma #7》2017
Photo: Zhang Kai
Courtesy of Galleria Continua

小杉 大介

Daisuke Kosugi

1984年東京都生まれ。オスロ(ノルウェー)拠点。

小杉は、オスロ芸術大学卒業後、映像作品を中心に、彫刻、インスタレーション、パフォーマンスやテキストなどを通じて、社会を制御する制度や規律の中で揺れ動く個の主体性を探求してきた。身体的または精神的痛みの伝達可能性を問う彼の作品は、物語の描写や、感情移入を促すような表現からは慎重に距離をおく。小杉の作品を構成する、記憶と現実と想像の境界を揺るがすかのような風景は、個が生きている時間や空間に接近し、到達することのない内的領域の存在を示唆する。

近年の主な展覧にジユド・ボーム国立美術館(2019年、パリ、フランス)、国際展には光州ビエンナーレ(2016年、韓国)など。国内では2021年に東京都現代美術館の「MOTアニュアル2021 海、リビングルーム、頭蓋骨」にて紹介される。



《グッドネーム(バッドフレーズ)》2017
Photo: Kjell Ove Storvik/LIAF 2017
Courtesy of the artist

ミシェック・マサンヴ

Misheck Masamvu

1980年ベンハロンガ(ジンバブエ)生まれ。ハラレ(ジンバブエ)拠点。

主に画家・彫刻家として活動するミシェック・マサンヴは、自身の作品を抽象と具象の間で揺れる「ミュウタント(突然変異体)」と表現する。その活動は、政府によるイデオロギー統制や人間性の追求の破綻に対する闘争である。存在の証として捉えられるその作品群は、彼の実体験をそのまま提示するだけでなく、精神的な空間をも指し示す。キャンバスに重ねられた絵具の層や筆跡がこれまでの葛藤や決断に向き合うよう促すのだ。

近年は、個展「Talk to me while I'm eating」グッドマン・ギャラリー・ロンドン(2021年、英国)、「Allied with Power」パレス・アート・ミュージアム・マイアミ(2020年、米国)、第22回シドニー・ビエンナーレ(2020年、オーストラリア)に参加。その他、第54回ヴェネチア・ビエンナーレ(ジンバブエ代表、2011年、イタリア)など。



《Still Still》2012-現在
Courtesy of the artist and Goodman Gallery(Cape Town, Johannesburg, London)

三輪 美津子

Miwa Mitsuko

1958年愛知県生まれ。愛知県拠点。

アイデンティティというある種の呪縛からの解放を願って初期の頃から常に作品のスタイルを変えたりという方法を選択、現在に至る。「見る行為」そのものを浮かび上がらせたいという思いから、作り手である以上に完成した作品を最初に見る人間であるという立ち位置を意識した制作を行なっている。

1996-1997年フィリップ・モリス財団の奨学金によりクンストラーハウス・ベタニエン(ベルリン、ドイツ)に滞在、1998年IASPISのゲスト・アーティスト(ストックホルム、スウェーデン)。主な個展にロングハウス・プロジェクト(2014年、ニューヨーク、米国)、ギャラリーHAM(2009年、愛知)、グループ展に「消失点-日本の現代美術展」(2007年、国立近代美術館、ニューデリー／プロジェクト88、ムンバイ、インド)など。



《STATUE(彫像)No.4》2009 名古屋市美術館寄託
Photo: Keizo Kioku Courtesy of the artist

モハンマド・サーミ

Mohammed Sami

1984年バグダッド(イラク)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

モハンマド・サーミは、2005年までインスティテュート・オブ・ファインアーツ(バグダッド、イラク)で絵画を専攻。2007年にスウェーデンに移住。2015年には、アルスター大学ベルファスト校芸術学部(北アイルランド、英国)で優等学位を取得。2018年にはロンドン大学ゴールドスミス校(英国)にて、美術学修士を取得した。

モハンマド・サーミは、紛争や暴力の持つ過激なイメージに対抗する寓意的な表現としての絵画に取り組む。彼の絵画は、日常のものやありふれたものから想起される在りし日の記憶、つまり故郷のイラクから難民としてスウェーデンに移住してきたときの記憶を辿ろうとするものである。



《難民キャンプ》2020
Courtesy of the artist and Modern Art, London

百瀬 文

Momose Aya

1988年東京都生まれ。東京都拠点。

映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複層性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を扱いながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。

主な個展に「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」EFAG East Factory Art Gallery(2020年、東京)、「サンプルボイス」横浜美術館アートギャラリー1(2014年、神奈川)、グループ展に「彼女たちは歌う」東京藝術大学大学美術館陳列館(2020年)、「六本木クロッシング2016展」森美術館(東京)、「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(2015年、国立新美術館、東京／2016年、韓国国立現代美術館、果川)など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨークに滞在。



《Jokanaan》2019年
愛知県美術館蔵

奥村 雄樹

Okumura Yuki

1978年青森県生まれ。ブリュッセル(ベルギー)及びマーストリヒト(オランダ)拠点。

翻訳者の特殊な主体性に触発されつつ異なるアーティストたち(しばしば奥村自身を含む)の作品及び人生を結ぶことでその重なりと隔たりから世界の本質的な平行性と意識の根源的な相互連結性を探究している。近年は自身のパーソナリティを極限まで削減しようと試みた60-70年代のコンセプチュアル・アーティストたちの方法論に「身体的自己」の表出と「自他合一」への志向性を感知しながら遠い時空から響く彼女らの声に耳を傾けている。主なプロジェクトに《孤高のキュレーター》(2021年)、《彼方の男》(2019年)、《帰ってきたゴードン・マツク=クラーク》(2017年)、《奥村雄樹による高橋尚愛》(2016年)、《グリニッジの光りを離れて——河名温編》(2016年)などがある。



《彼方の男》2019
Courtesy of MISAOKO & ROSEN, Tokyo and LA MAISON DE RENDEZ-VOUS, Brussels

カズ・オオシロ

Kaz Oshiro

1967年沖縄県生まれ。ロサンゼルス(米国)拠点。

高校卒業後ロサンゼルスに渡り、カリフォルニア州立大学で1998年と2002年にそれぞれ文学士と美術学修士を取得。ポップアートやミニマリズム、抽象的表現主義などを参考にしながら、それらの思想を独自に展開し、立体と平面、抽象と具象、リアリティとイリュージョンなど、さまざまな二項対立の上に立って、「絵画」と「芸術」の本質を探っている。トロンブリユ(だまし絵)のテクニックを用い、キャビネット、スーツケース、アンブ、鉄骨などをキャンバスで忠実に再現し、観る者を惑わせながらも魅了する。国内外で精力的に展示を続けており、2014年にはロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)で個展「Chasing Ghosts」も開催された。



《オレンジスピーカーキャビネットとグレースケールボックス》2009
Photo: Naohiro Utagawa
Courtesy of MAKI Gallery

プリンツ・ゴラーム

Prinz Gholam

2001年コラボレーションを開始。ベルリン(ドイツ)拠点。

プリンツ・ゴラームは、ヴォルフガング・プリンツとミシェル・ゴラームによるアーティスト・デュオ。2001年より活動。身体表現と共同作業を基盤にライブ・パフォーマンスやビデオ、ドローイング、オブジェ、写真、テキストによるインスタレーションを発表。文化の規範とこの世界との間で、自己と身体を再び呼び起こし、配置し、調整する現在進行形で試みる。

作品は文化的な枠組みの下で、意識的かつ意図的にその姿を顕在させる。パフォーマンスでは、二人による現代人の身体動作を通して、精神と身体の問題を提起。また、双方の異なる文化を背景に、年齢、個性、教育、社会的背景や地理的出自にまつわる問いも投げかける。

主な発表歴として、マツタイオ(2021年、ローマ、イタリア)、ドクメンタ14(2017年、アテネ、ギリシャ/カッセル、ドイツ)などがある。

ヴォルフガング・プリンツ 1969年ロイトキルヒ(ドイツ)生まれ。
ミシェル・ゴラーム 1963年バイルート(レバノン)生まれ。



《時代の精神 -L'esprit de notre temps- (サンパオロ・デル・ブラジレ通り、ローマ)》2021
© Prinz Gholam

眞田 岳彦

Sanada Takehiko

1962年東京都生まれ。東京都拠点。

ISSEY MIYAKEでデザインを学び、渡英、彫刻家リチャード・ディーコンにアートを学び独立。北極圏グリーンランドに滞在した30歳の時「或る狩人の死」と遭遇した体験から、「生命・存在とはなにか」という根源的問いと向き合う。以来、繊維を媒体にした造形作品を国内外ギャラリー、美術館に出品。同時に繊維研究者として各地の伝統繊維、先端繊維の調査を行い日本の繊維文化、歴史に光を当て、自治体や繊維関連企業とのプロジェクト、繊維を通じた教育、防災など社会支援企画を開催。

主な活動は、日本最古の布を再興する越後の「アングインプロジェクト」(2002年-)、日本各地で棉栽培から作品制作までを行う「コットンプロジェクト」(2008年-)など。



《内秘する者の為に(ないひするものために)》2018

笹本 晃

Sasamoto Aki

1980年神奈川県生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

ニューヨーク在住。10代で渡英、その後米国にて美術、ダンス、彫刻等を学ぶ。個人の心理状況やパーソナリティの表徴としての癖や習慣に興味を抱くようになり、以後、日常的な行為や手順をテーマにしたパフォーマンス、彫刻、インスタレーションを発表している。ビジュアルアーティストやミュージシャン、振付師、科学者、学者等幅広い分野の人間とのコラボレーションも多数展開し、自他の作品の中で笹本はダンサー、彫刻家、ディレクターとして様々な役割を演じる。現在イエール大学の彫刻科で教鞭をとっている。

主な展覧会歴には「Delicate Cycle」スカルプチャーセンター(2016年、ニューヨーク、米国)での個展、「開館40周年展 トラベラー:まだ見ぬ地を踏むために」国立国際美術館(2018年、大阪)、ホイットニー・ビエンナーレ2010(ホイットニー美術館、ニューヨーク、米国)など。



《ランダム・メモ・ランダム(random memo random)》2017
© Aki Sasamoto
Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

塩田 千春

Shiota Chiharu

1972年大阪府生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」、「存在とは何か」を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。

2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015年には、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展(イタリア)の日本館代表に選ばれる。また、ニュージーランド国立博物館テ・ハバ・トンガレワ(2020年、ウェリントン)、森美術館(2019年、東京)、南オーストラリア州立美術館(2018年、アデレード)、ヨークシャー彫刻公園(2018年、英国)、国立国際美術館(2008年、大阪)を含む世界各地の個展のほか、国際展などのグループ展にも多数参加。



《不確かな旅》2016/2019 個展「魂がふるえる」森美術館、東京
Photo: Sunhi Mang, Courtesy of Mori Art Museum
©JASPAR, Tokyo, 2021 and Chiharu Shiota

横野 明日香

Yokono Asuka

1987年愛知県生まれ。愛知県拠点。

ダムや高速道路などの公共建築物から、ポットや花瓶といった日常にあるものまで、幅広いモチーフを油彩で描く。人がものを見ていかに空間を感じるのかということに関心があり、構図やタッチ、絵の具の重ね方や色彩など、絵画の基本的要素を用いてそれを表現している。

近年の主な展示に、「あざみ野コンテンポラリーvol.10 しかくのなかのリアリティ」横浜市民ギャラリーあざみ野(2019年、神奈川)、「瀬戸現代美術展」瀬戸サイト(2019年、愛知)、「組み合わせ」See Saw gallery + hibit(2018年、愛知)、「不自由なしかく」GALLERY ZERO(2018年、大阪)など。



《高速道路のある風景》2019

「あいち2022」のラーニング・プログラムは、「アートは一部の愛好家のためのものではなく、すべての人がそれぞれのやり方で楽しみ享受するもの」という基本的な考え方に基づいています。

例えば、揃いの青いハッピーを着て神輿を担いだり、銀玉鉄砲やクラッカーで遊んだりした地元の神社の祭りのような芸術祭。それは、芸術祭を見に来た人、参加した人がコミュニティの一員として参加している実感、社会に空間的・時間的に包摂されていると感じることなのではないでしょうか。そのために「難解な現代アート」というイメージやレッテルを払拭し、素の目で作品と向き合い、アートとの直接的な関わりを促すことを、「あいち2022」のラーニング・プログラムでは実践していきたいと考えています。

そもそも現代アートは、私たちと同じ様に、世界の何処かに暮らす個人やグループが作り出したものです。鑑賞者はそこにある作品を通して、どこかの誰かが見つけ出した視点から世界に出会う機会を得るのです。そうすることで、普段は見過ぎていた物事に新しい価値を発見したり、自分と歴史・社会がつながっていることに気づいたり、生きていることの尊さとおかしみを感じたり、と様々な反応が自らの内に起こってくる。アートに触れることと、世界を知ること、そして自らを知ることとは不可分に結びついているのです。

欧米、アジア太平洋、ラテンアメリカ、アフリカなど世界各地から現代アートが集まるこの芸術祭は、たくさんの地域のたくさんのアーティストたちの作品と出会い、たくさんの視点から物事を見たり考えたりするチャンスです。世界についての認識を広げ、深め、翻って自分自身を見つめ直す、そうした活動の総体を「ラーニング／学び」と位置づけ、それを実現するためのプログラムを提供していきます。

アートを通じた学びによって、これからも起こり続けるであろう未知の事態を乗り越える力、まさに「今、を生きる力」を一人一人が獲得し、多様な未来の可能性に開かれた世界を実現するために。

ラーニング・チーム

コンセプト

1. 包摂：参加することで、自らが祝福されていると感じることができる
2. 多様性の肯定：同時代を生きる作家によって表現される多様な「ALIVE(生きている)」のあり方、その視点に触れる
3. 自分を知り、世界を知る：愛知という地域の歴史的・文化的背景を知り、ローカル独自の視点を持つことで、世界中から集まってくる様々な作品を通じた世界の見方との出会いの準備とする。

プログラム

フェーズ1 | 2021年8月～

愛知の歴史・文化や芸術祭などの成り立ちについてのリサーチを通してアートを読み解くための基礎体力づくりを行う。

フェーズ2 | 2022年4月～

参加アーティスト等との交流を通して出品作品への理解を深める。

フェーズ3 | 芸術祭開催中

作品と社会とをつなげる活動を主体的に行う。

参加プログラム [for all]

地域の方々、専門家、アーティストらと協働し、様々なリサーチ活動やラーニング・プログラムを展開します。

- ・ さまざまな切り口で美術の歴史をストーリーとして読み解く力を養う「アーティストによる美術史講座」(フェーズ1)
- ・ 芸術祭を歴史的な視点から考える「『芸術祭』をひも解く：近代化と万博-オリンピック-芸術祭」(フェーズ1)
- ・ 我々が現在立っている場所について明らかにしながら、「世界とは何か」という謎に迫る「愛知と世界を知るためのリサーチ」(フェーズ1～3)
- ・ 世界のオルタナティブな学びの実践をシェア「knowing me, knowing you 世界のアートの知の技法：オルタナティブなアートスクール／ラーニング・プログラムのリサーチ」(フェーズ2～3)

スクール・プログラム [for school]

教育関係者向けの研修プログラムや、児童・生徒向けの団体鑑賞プログラムを用意し、地域の教育機関との連携を図ります。(フェーズ1～3)

ボランティア・プログラム [for volunteer]

ボランティア研修を通じて「対話型鑑賞」の手法を普及し、これまでアートに馴染みが無かった来場者も、対話をしながらアートを楽しめる芸術祭の姿を目指します。(フェーズ1～3)